

五十 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その二

園丁 認識を人間の営みとして自分に引き寄せて考えてみます。一言で言えば、認識とは事物を分節してとらえていくことだ、と僕は思います。生き物の立場に立つと、生きていくのに外界を分節してとらえることが必須なことは論を待ちません。外界にモノがどう在るかという動きをするか認知するには、まずモノをほかのモノと区別する必要があります。そして、どんな実在物も空間と時間において存在するのですから(認識が進んでこのことを知りますが)、分節はモノを空間と時間において区別することから始まりまます。すると、いつの時点かで生命が発生して進化してきたとすれば、物理的外界を理解するために、生き物で、分節の能力が進化し、同時に空間と時間を認知する能力も進化して、われわれ人間に至ったと考えることができます。

庄周 おや、認識を論じているところに生物学をもちこむのですか?。議論を拡散させませんか?。

園丁 えっ?。はい、用心することになります。でも、カントが空間と時間の議論から始めたのは、ニュートン力学に影響されたからだというのは確実です。認識を考察するのに、

認識が進んで得られた科学の知見を援用するのは許されることだと思えます。

莊周 ただし、論理の体系を乱さない限りでという条件をつける必要があるでしょう。

園丁 そのところは莊周さんに注意をお願いします。

莊周 おやおや。しかし、今の君の言い方だと、空間と時間の概念は経験的に得られるということになりませんか？。

園丁 えーと、人間の認識は、カントがよく認識しているように、経験に基づいて遂行されるのです。ですが、その本質的に経験的な分節を記述するのに、整然とした理論を求めるとは、最初から、可能な限り経験の内容と切り離せる概念を抽出しておこうとしたと見なすことが可能です。それが空間と時間という抽象概念だったのです。経験的條件を度外視して先験的なことを切り出すここでは、まだ「だれが」は出てきませんが、「どこで」と「いつ」を分節の基本要素として取り出せるように、空間と時間の概念を形式化したのだと思います。

莊周 なるほど、君はそういうふうにか考えるのですか。

園丁 あなたは僕の話をお見通しのようにですが、僕の試みを続けます。カントが認識について次に考えるのは、分節一般の分類です。人があることを認識できたと思うのは、頭

の中で、「だれが（なにが）」、「いつ」、「どこで」、「なにを」、「どうした（どうである）」と、まとまった形に構成できたときです。これが認識の基本形だと言ってよいでしょう。人は外界を観察してこのような分節の営みをしているのです。そこで、分節において、経験から切り離して先験的と呼べるものはあるでしょうか。まず、分節から経験の内容を捨象しても残るテーマがどういふ種類のことを指向しているかといったことが分類できるでしょう。また、三つの要素「だれが」「なにを」「どうした」は経験に結びついていますが、それでも先験的と言うことが可能なことがまだあるとすれば、それらを組み立てる論理の型です。

ここまですを僕流に一言で言えば、事物を分節して進む認識は、基本的に空間と時間を指定しながら行われ、事物を認識する際に分節は指向性や論理の型をもつ、そして、空間と時間および分節の指向性や論理形式は経験と切り離して先験的と見なすことができる、ということになります。

莊周 なんとも薄っぺらな考察になりましたね。形式だけを論じてはいけません。カントがしたように、人間の認識を担っている能力や働きも考えて論じましょう。

B 悟性が概念を組み立てて現象の認識に至るやり方

園丁 ご忠告に従ってカントの言うことに耳を傾けます。最初に、カントがア・プリオリな（先験的な）認識に集中している理由を確認しておくことが必要ですね。人間の認識で数学や幾何学ほど確実なものはありません。その命題は必然性と厳密な普遍性を持ちます。それに対して経験は、「それ以外ではありえない」という必然性を与えないし、帰納による普遍性しか与えない。そこで、カントは、数学や幾何学のように、経験を蒸発させて結晶となった、必然性と普遍性をもつア・プリオリな認識を抽出しようとするのですね。そのような認識を構成するためには、その要素も経験を蒸発させた先験的なものでなくてはなりません。

数学の例からしても、人間はア・プリオリに認識する能力をもつのです。ここで、カントは、物体という経験概念からいっさいの経験的なものを除き去っても、実体という概念を消し去ることができない、実体概念が人間の認識能力のうちにア・プリオリに座を占めている、と言います。この言葉を聞いて、夢見る庄周さん、これらいっさいがただ観念の夢のうちで起きていると主張しますか？。力学を受容し星の誕生の理論を考察したカントが、比喻ではなく、自分は観念のうちで遊んでいるだけだと考えたでしょう

与えられるのです。それなら、人間がいなるとき対象はどのようなかとおあなたは問いそうですが、その問題は別のところで考えましょう。カントは、感性のレヴェルで外界を知覚して対象を把握する働きを直観と呼び、このところをとっても慎重な言い方で考えますね。経験的直観によってまだ規定されていない対象を現象と呼んで、直観がモノを把握すると断定することを避けます。理性理論の最後まで物自体は知られないという立場を貫きます。この立場が三浦さんの唯物論ではまったく受け入れられません。カントのこの慎重さは、哲学史上、懐疑主義や経験主義を克服しようとする段階で必要だったのでしょうか？。それとも、認識が進むまで対象がどんなものかよくは判らない、認識が何を明らかにできるか認識の予備学の段階では不明である、と考えたのでしょうか。

庄周 わたしは知りません。対象をモノと考えるか現象と考えるかというふうな考え方をしたことはありません。

園丁 そっけないですね。この問題はまた考えることにして僕なりの解釈を進めましょう。感覚が現象を相手にしていることになりました。現象は、のっぺらぼうではありませんから、一般的に、構造的な内実（質料）をもち構造には形式があります。それでは、現象はどのようにして認識に「反映」するのでしょうか。カントは、現象の質料を整理し関

係づけて形式に納めると言います。現象の質料を感覚が経験的に受けとるとして、それらを納めとることができる形式がア・プリアリに人間の心に具わっているのでなければ認識は成立しないと考えているのです。Aで考えたように、そのような直観の形式が空間と時間なのですね。自然の現象の形式が人間にア・プリアリに具わっているという言い方は、観念論的に聞こえるでしょう。でも、生命が発生し、感覚器官を具えた人間に進化して、直観の形式が現象の形式と一致するようになっていて、と僕は唯物論的に了解します。人間の精神活動である認識全体が物質的に遂行されると考えます。感性能力が感覚器官によって生み出されることを、莊周さんも否定しないでしょう?。

莊周 君の言うように外界にモノがあるとして、人間が感覚を介してモノが空間と時間のうちにあると直観することを、そのようにかっちり記述しなければおちつけないカントという人には感心します。西洋の哲学の流儀なのでしょうね。

*

莊周 事物を直観できたとして、事物を判ったと言える働きの方はどうしますか?

園丁 感性によって受けとった表象を処理して対象を認識する能力ですね。カントは、これに悟性という言葉を当て、概念をつくり出し、思惟を可能にする能力とします。認識

は、感性による直感と悟性による概念を結合して成立するのです。そして、直観について経験を蒸発させて形式を抽出したように、概念とその結合についても経験を蒸発させた形式があり、それがア・プリアリに可能だとします。

先ほどの「現象の質料を整理し関係づけて形式に納めとる」という言葉が、悟性にも当てはまるでしょう。その形式は悟性の規則ということになります。したがって、思惟の規則、中でも悟性の使用に必須の規則を解明する論理学が中心的な課題になります。カントは、『純粹理性批判』ではとりわけ、経験を必要としない、また、内容にかかわらないア・プリアリな形式を扱う先験的論理学を論じています。

短絡的に言えば、思惟のやり方、構造的な現象を概念で組み立てる形式や規則とは、僕流に言った分節の指向性や論理形式ということになりましょうか。

荘周 またあの言い方に帰りますか。やれやれ。肝心なのはその先験的論理学をよく理解することですよ。

園丁 はい、カントの言うことをよく聞きます。この論理学でなによりもなすべきことは、認識を分析して、要素となる悟性概念を整理することです。その先験的論理学の主要部を、カントは先験的分析論と呼びます。そして、分析して整理される概念は、経験的なものではないこと、直感や感性に属するものではなく思惟と悟性に属すること、派生や

合成以前の基本的概念であること、純粹悟性の全領域を包括する完全性をもつことの四つの要件を満たすべきものとします。これは、言いなおせば、純粹悟性概念に欠けるところがなく、それらに関連させれば一つの全体をなす純粹悟性認識の体系をなして、この体系に組み入れられる個々の認識の適当・真正を判定できる、という理念的な要請です。どこかに漏れがあるのでは、認識をどこまでも進めていくことができません。

カントは、彼のしていることを、それまでほとんど手のつけられていなかった「悟性能力そのものを分析」すること、すなわち、ア・プリオリな概念をその出生地である悟性において求め、悟性概念の可能を究明することであると表明します。これこそ先験的哲学の本来の仕事だと。

莊周 ちよつと立ち止まって！。君はなんだかもたしていますよ。先験的論理学は『純粹理性批判』の大部分を占める議論です。君はそれを必要なほど理解したうえで問答を進めていますか。

園丁 僕がそんな大それたことのできる者でないことを、あなたは元からご存知じゃありませんか。自分の身のほどは心得ているつもりです。僕がしようとしているのは、人間の中で認識がどのように起きているか、自分なりにおおよそ言えるようになることです。どうか手伝ってください。

莊周 この調子につきあうのはしんどいですね。君がカントの言っていることを全部把握するのは無理でしょうから、もう少し選択的に考えませんか。

*

園丁 それでは、認識における論理の骨格へ進みます。その前に、僕が概念と悟性という言葉を正確に理解しているか心もとないですから、概念は、対象の像である種々の表象を一つの共通の表象のもとに集めて得られ、これらの表象に秩序を与えて統一することを目指していること、そして、判断の能力である悟性が概念に判断を適用して表象を統一すること、また、悟性は論証的に認識を遂行することを復唱しておきます。

判断一般から一切の内容を度外視して得られる判断の悟性形式を整理すると、次のような判断の論理的形式が四つ得られる、とカントは結論します。大事なことですし、くりかえし見ることができるよう、その表をわたしたちの前に掲示しましょう。

全称的判断

すべてのAはBである

1 分量

特称的判断

若干のAはBである

单称的判断

このAはBである

2 性質
 肯定的判断 AはBである
 否定的判断 AはBでない
 無限的判断 Aは非Bである

3 関係
 定言的判断 AはBである
 仮言的判断 AはBならばCはDである
 選言的判断 AはBであるかそうでないならCである

4 様態
 蓋然的判断 AはBでありうる
 実然的判断 AはBである
 必然的判断 AはBでなければならない

園丁 僕は人間という生き物が外界を認識できることに感嘆し不思議に思います。ですから、カントが認識の可能を論理づけようと努力していることに共感します。カントは、人間の心に(アイドリングしているのでしょうか)無意識的な構想力があると考えます。感性によって直観された多様な表象は、この構想力によって総合されて悟性がその総合に統一を与え、認識が始動すると考えるのです。それは悟性の得る表象と言えますが、

総合的な統一をもたらすという意味をこめて概念と呼ぶことができます。ここで、先に内容を度外視して判断の悟性形式すなわち判断の論理的形式を得たように、純粹悟性だけに該当する概念を抽出することができます。この純粹悟性概念は、先験的に対象に關係し、悟性の得る一般の表象に先験的に特性を付与するのです。莊周さん、この言い方で正しいでしょうか？

莊周 君が精いっぱいやったことは認めます。

園丁 とにかく、カントは、認識の仕方を整理する四つのカテゴリーと呼ばれているものを抽出したのです。概念を特徴づける性質あるいは認識において分類の指標と言えるでしょうか。そのカテゴリー表もわたしたちの前に揭示しましょう。

単一性

1 分量 数多性

相対性

実在性

2 性質 否定性

制限性

3 関係 付属性と自存生 (実体と付随性)
因果性と依存性 (原因と結果)

相互性 (能動者と受動者とのあいだの相互作用)

可能——不可能

4 様態 現実的存在——非存在

必然性——偶然性

園丁 このカテゴリー表は判断の論理的形式の表とまったく同じ形ですね。四つの分類とそれぞれの三つの項がちょうど対応します。先の判断の論理形式は悟性の分析的統一の働きに伴うものであり、カテゴリーは悟性の総合的統一の働きに伴うものとされます。人間が思惟するとき、分析し総合する営みが調和的に働いて認識が成立するという考えなのでしよう。

園丁 カントは、自分の抽出した判断の論理的形式とカテゴリーは経験的なものを蒸発させて余分なものを含まない純粹なもので、先の要請のように欠けるところのない基本概念だと宣言します。たしかにここに、人間が考えるときにいつもする分類とか体系化と

かの基本型があるように思います。

空間と時間の形式および判断の論理的形式とカテゴリーの抽出は、力学を比喩にとれば、世界の次元と現象一般が生起する法（規則）を見出したことに当たるでしょうか。ここでは、経験が対象とするモノ（事物）が何かは問われません。人間のどんな経験もこの形式で受けとめることができ、それに基づいて具体的な認識が始動する、と考えればよいのですね。

莊周 世界というのは仏教で時間・空間を意味し、中国では順序が逆ですがそれを宇宙と呼ぶのです。すべての事象はそこで生起します。あなたの言い方では世界（事象）と人間の認識との関係があいまいですが、ともかく、カテゴリーまでたどり着いて、あなたは精力を使い果たしたように見えます。一休みしましょう。

園丁 ええ、僕は、人間がどういうようにして認識するのかだいぶ分かったような気がしません。カフエインのないハーブティーを一服しましょう、眠りを妨げて夢から覚めることがないように。